



◆授業者・三上満さんより  
 高校生の皆さんへ の呼びかけ

「雨ニモマケズ」や「銀河鉄道の夜」で知られている宮沢賢治。37年の短い生涯でしたが、人びとが幸せに生きられる世の中をどうしたらつくれるかを探求しつづけた生涯でした。その作品には、あらゆる生命をいつくしむ心、どんな人でもダメなものはないという人間平等の精神、人びとのために尽くすひたむきさなどがこめられています。豊かで奥の深い宮沢賢治の世界へ、一緒に分け入ってみようではありませんか。



高校生公開授業 今年もやります!

宮沢賢治作品

水仙月の四日

を読む



宮沢賢治に魅せられ、賢治の理想を胸に中学校教師に、  
 荒れる中学生と向き合う「金八先生」のモデルにも。  
 その三上満さんが、高校生たちと授業をします。

とき 2014年1月12日(日)  
 13:30~16:30

ところ フォレスト仙台2F ホール

※ 受講料、参加費は無料です。ぜひ受講生以外の皆さんも、まわりからご参観(加)ください。

《受講申し込みについて》

★募集定員 高校生 40名(受付は先着順、定員になり次第終了)

※なお、高校生でなくても受講したい方の申し込みも歓迎します!

★参加申し込み・問い合わせは、みやぎ教育文化研究センターまで

(TEL 022-301-2403 E-mail: mail-mkbkc@mkbkc.com)

※ 受講生以外のみなさんは、まわりで参観(加)ください。



## 【三上満さん プロフィール】

1932年、東京生まれ。55年に東京大学教育学部卒業。「教育は子どもの希望を育むもの」という信念のもと、子どもたちに真っ正面からぶつかり、子どもたちを愛しいつくしみ、パイタリテイあふれる教師人生をおくる。「3年B組金八先生」のモデルの一人でもある。現在は、宮沢賢治研究をライフワークに、医療・福祉、平和、教育運動など多方面にわたって活躍。

主な著書に、『眠れぬ夜の教師のために』(大月書店)、第18回岩手日報文学賞・賢治賞受賞の『明日への銀河鉄道』、『賢治の北斗七星』(新日本出版社)、『人間の明日と向き合う』(かもがわ出版)、『賢治の旅 賢治への旅』(本の泉社)など多数。

【作品介绍】 賢治童話の傑作のひとつ。「水仙月の四日」は吹雪の特異日。雪婆んごたちがやってきて山は猛吹雪、町へ出かけた帰りに吹雪にあった子どもを、その山に住む雪童子(わらし)が救います。生命のいとおしさ溢れる名作です。以下は、『水仙月の四日』の冒頭の部分です。

雪婆んごは、遠くへ出かけて居りました。

猫のやうな耳をもち、ぼやぼやした灰いろの髪をした雪婆んごは、西の山脈の、ちぢれたぎらぎらの雲を越えて、遠くへでかけてゐたのです。

ひとりの子供が、赤い毛布にくるまつて、しきりにカリメラのことを考へながら、大きな象の頭のかたちをした、雪丘の裾を、せかせかうちの方へ急いで居りました。

(そら、新聞紙を尖つたかたちに巻いて、ふうふうと吹くと、炭からまるで青火が燃える。ぼくはカリメラ鍋に赤砂糖を一つまみ入れて、それからザラメを一つまみ入れる。水をたして、あとはくつくつくと煮るんだ。)ほんたうにもう一生けん命、こどもはカリメラのことを考へながらうちの方へ急いでゐました。

お日さまは、空のずうつと遠くのすきとほつたつめたいとこで、まばゆい白い火を、どしどしお焚きなさいます。

その光はまつすぐに四方に発射し、下の方に落ちて来ては、ひつそりした台地の雪を、いちめんまばゆい雪花石膏の板にしました。

二足の雪狼が、べろべろまつ赤な舌を吐きながら、象の頭のかたちをした、雪丘の上の方をあるいてゐました。こいつらは人の眼には見えないのですが、一ぺん風に狂ひ出すと、台地のはづれの雪の上から、すぐぼやぼやの雪雲をふんで、空をかけまはりもするのです。

「しゅ、あんまり行つていけないつたら。」雪狼のうしろから白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔を苹果のやうにかがやかしながら、雪童子がゆつくり歩いて来ました。

雪狼どもは頭をふつてくるりとまはり、またまつ赤な舌を吐いて走りました。

「カシオピア、

もう水仙が咲き出すぞ

おまへのガラスの水車

きつきとまはせ。」

雪童子はまつ青なそらを見あげて見えない星に叫びました。その空からは青びかりが波になつてわくわくと降り、雪狼どもは、ずうつと遠くで焰のやうに赤い舌をべろべろ吐いてゐます。

「しゅ、戻れつたら、しゅ、」雪童子がはねあがるやうにして叱りましたら、いままで雪にくつきり落ちてゐた雪童子の影法師は、ぎらつと白いひかりに変わり、狼どもは耳をたてて一さんに戻つてきました。

「アンドロメダ、

あぜみの花がもう咲くぞ、

おまへのランプのアルコール、

しゅうしゅと噴かせ。」

雪童子は、風のやうに象の形の丘にのぼりました。雪には風で介殻のやうなかがつき、その頂には、一本の大きな栗の木が、美しい黄金いろのやどりぎのまりをつけて立つてゐました。